

もくじ

中学生の部

最優秀賞	SDGs 実現のために	川越西中学校	3年	阿野 晃明	2
優秀賞	「着る」ことを考える	南古谷中学校	2年	齊藤 ひより	3
優秀賞	私が好きなもの	大東中学校	3年	小村 美柚	4
入選	私たちは障害者の心の支え	野田中学校	1年	高橋 麗	5
入選	差別のない世の中へ	東中学校	1年	高木 菜央	6
入選	「ぼっち」を楽しむ	東中学校	3年	高山 玄	7
入選	自分自身と向き合うこと	東中学校	3年	森山 楓	8
入選	差別のない未来へ	大東中学校	3年	寺崎 桃花	9
入選	今だからこそ、できること	大東西中学校	2年	小野崎 愛乃	10
入選	「宇宙船地球号」の危機	川越西中学校	1年	野本 和希	11
入選	生きがいと感謝	川越西中学校	3年	奥富 晴菜	12
入選	面倒臭いでは済まされない	星野学園中学校	2年	関 彩花	13

高校生の部

入選	高齢社会と思いやり	星野高等学校	2年	秋山 晴香	14
選評	15
応募者名簿	16

◆最優秀賞◆

SDGs実現のために

川越西中学校

3年

阿野あの

晃明こうめい

「SDGs」という言葉をご存知だろうか。テレビや雑誌でも度々取り上げられており、内容は知らなくても、色とりどりのピクトグラムを目にしたことがある人は多いだろう。

SDGsとは、全世界で経済・社会・環境を持続的に発展させていくために掲げられた目標のことだ。全体の根底に流れる基本方針が「誰一人取り残さない」で、これは日本が掲げる「一億総活躍社会」の実現とも一致している。素晴らしい目標だと思うし、全世界で積極的に取り組むべき課題だと思う。

しかし、現状それが上手くいっているには見えない。福祉ばかりか社会からも取り残されている人がたくさんいる。

たとえば、私の兄は発達障害者だが、社会で生きること非常に苦労している。確かに空気が読めず時々会話がかみ合わないことがあるし、何でそんな事をするの？という事をしたりする。けれど、私からすればちよつとばかり気が利かないだけの、頭が良くして優しい普通の兄だ。

しかし、兄の障害はあまり周囲に理解されない。学校の先生ですら、対応が分からず無意味に怒ったりする。兄の特徴を知らない周囲の人と、トラブルになったことも一度や二度ではない。

兄は、言葉の裏の意味を理解するのが苦手だ。「ここをきれいにしておいで。」という指示が通じない。「掃除機をかけて、床をふいて、ゴミを捨てて。」と言わなくてはいけない。やって欲しいことが違えば、その度に詳しく説明しなければならず、正直かなり面倒くさい。

ただ、兄は普通の人よりずっと記憶のメモリーが多いので、何度も経験を積みめば、状況や相手の言葉の調子から、「何をして欲しいか」を理解することができるようになる。

きちんと説明すれば、いずれ普通以上にできるようになる……この経過を知らないというライラシ、「なんでこんな事もできないの？」となってしまう。結局、兄が周囲に受け容れられるためには、その障害の特徴や対応を知ってもらわなければならないのが現状だ。

兄は数学が得意だが、大問の三から解いたりする。「一からやるより簡単だから」らしいが、誰にでもできることではないと思う。自分には分からない何かが、兄には見えているのだと感ずることは多い。

こういった能力は、どんなことにも必要ではないだろうか。新しいものを生み出したり、誰も気付かなかったことにも気付いたりする。そういった能力を埋もれさせず、もっと社会で活用するべきではないか。

発達障害だけに関わらず、他の身体障害や精神障害も同じだ。どうやって付き合っていけばいいのか知る機会を得ることで、我々はストレスがなくなり、彼らも個性や能力を思う存分発揮できる。

私たちは、学校や社会などで障害を知る機会を増やすべきだ。そうして理解を深めることで、障害を持つ人たちは自信を持って社会に参加できる。それが、二〇三〇アジェンダを達成する一助になるに違いない。

誰一人取り残さないよりよい社会、誰もが活躍できる未来を創るために、私たちは「知る」ことに対してもっと努力しなければならない。

◆ 優 秀 賞 ◆

「着る」ことを考える

南古谷中学校

2年

齊藤 ひよりさいとう

みなさんは今、服を着ていますか？まさか着てないという人はいないと思います。お風呂に入っている場合を除いて、誰もが身につけている服。それは私たちの生活必需品の一つです。しかし、その服をめぐる世の中では社会問題が起こっています。それは「大量廃棄社会」です。

日本では、一年間に約十億枚の新品の服が捨てられているそうです。その理由は、必要以上に服が作られ、売れ残ってしまったところにあります。では、なぜ必要以上に服が作られているのでしょうか。原因はさまざまですが、身近な原因を挙げると、私たちが安くて、しかも、そこそ良い商品を探めているからです。私も季節が変わるたびに新しい服が欲しくなるし、トレンドのものをたくさん着たいと思うので、一つ一つの服の値段はなるべく安いものを選んで買っています。これら消費者のニーズに答えるべく、売方も安くするためにバングラデシュやベトナムなどの人件費が抑えられる海外で大量の商品を作っています。

これらが売れ残り、廃棄されることになると、廃棄する時に排出される二酸化炭素や化学繊維による海水汚染などの環境破壊につながっていきます。また、衣服の製造には、私たちが想像する以上に多くの資源が使われています。環境省によれば、服一着を製造するために排出される二酸化炭素は約二

十五・五キログラム、使用される水資源は約二千三百リットルにも上るそうです。

私はこの事実を知り、とても驚いたのと同時に、自分も何かしなければという気持ちになりました。その時に思い出したのは、洋服屋に勤めている父のことです。父は服を選ぶ時、新品ではなく古着やフリマアプリで自分の気に入ったものを買っていました。その頃の私は、どうして新品の服を買わないのか疑問に思っていました。今思えばそれは「大量廃棄社会」に対しての行動の一つだったと気づきました。今の世の中は服を廃棄せざるを得ない状況になってしまっているけれど、改善策がないわけではないと思います。私は廃棄されてしまう新品の服を、貧しい国の方々に寄付すれば良いのではないかと考えました。また、高いからといって自分の欲しい服をあきらめるより、少し高くても良いものを大切に着るといって価値観が定着してほしいと思います。現実はどううまくいくとは限りませんが、この「大量廃棄社会」を止めるには、一人一人が服を着ることを考えることから始まると思うのです。私はこれからも未来のことを考えながら服を選び、大切に着ていきたいです。

◆ 優 秀 賞 ◆

私が好きなもの

大東中学校

3年

小村 おむら 美柚 み柚

私は現代短歌が大好きです。現代短歌とは名前の通り現代の短歌のことです。卵が安く買えたことや切ない恋愛感情、皮肉、幸福論など何でも、どんなことでも三十一文字のリズムに乗せれば現代短歌として花開くことができます。本は心の栄養と言いますが、私にとって短歌は心の燃料だと思います。なぜなら世界の見方を変えてくれたからです。

私が短歌と出会ったのは、国語の授業でした。短歌と聞いたとき、百人一首や与謝野晶子など古い時代の俳句みたいなものだと思っていました。しかし、授業で取り扱われたのは、「多」や「けり」などは使われていないし、なんだか親近感が湧く内容のものでした。一つの歌を読み解くと、作者の心情や情景がふわりと浮かんでくるようで、短歌ってなんて面白いんだろうと心から思えました。もつと知りたいと調べるたびに自分にはなかった価値観や色の付け方が流れ込むようでとても感動したことを覚えています。

短歌という文学は時代によって大分形が異なるそうです。今では砕けた口調で詠まれたりしていますが、昔はそうではなかったようです。大元の形は変わらなくても、文化を繋げてゆく度にその時代の色に染められているようでとても面白いなと思いました。また、どんな時代でも親しまれ、愛されているのは変わらないように短歌の共感性と意外性を兼ね備えた魅力に感動しました。

今の時代、インターネットやスマートフォンで美しい景色が見たいと思えばすぐに写真や動画などで調べることができるようになっていきます。どこかの国の鮮やかな珊瑚礁や壮大で迫力のある山々、カーテンのように揺らぐ

オーロラなど実際にその場に行かなくても、景色を楽しむことが十分にできます。けれど私たちの身の回りにも美しい景色や体験はたくさんあると思うのです。ありふれた道の端に力強く咲く花や雨の日の跳ねる足音、少し早く起きた日の静謐な空気と差し込む光。毎日見ている道の中にも、友達と話している時間にも、実際に見て触れて聞いてみると様々な色で日常は輝いています。斬新な視点から物事を眺めたり、日々を楽しみながら過ごしたり、ということも短歌から学ぶことができました。

しかし、なんだか歳を重ねる度に美しいと思ったことや、好きだなと思つたことを口に出したり、表現したりすることが減つたような気がします。別に生きていく上で好きなことを好きだと言うことは重要ではないかもしれませんが、花畑を見て花が咲いているなど思うだけでもよいと思います。けれども、私はそれではつまらないと思うのです。今という瞬間は一度きりだし、二度と同じ景色を見られないかもしれない…。だからこそ言葉や思いとして感じたこと、見える景色を心に留めておきたいのです。詩を楽しむことを忘れてしまった人がきつと世の中には多くいます。私もいつか子供の頃のように純粹な気持ちで物事を捉えられなくなるかもしれません。いつか子供心を取り戻したいと思った時に言葉としてすぐ口に出せる文学を大切にしたいと思います。短い文章一つでも大切なことはつめこめます。いつでも思い返せるようにこの文化を受け継いでゆくことを意識して、これからも学び続けていきたいと思いました。また、この慎ましくしたたかな芸術に触れることができることの喜びを噛み締めて、様々な作品を鑑賞したいです。

◆ 入 選 ◆

私たちは障害者の心の支え

野田中学校

1年

高橋 たかはし

麗 うらら

学校で、福祉についての授業がはじまると無意識に「あ、ここにも！」「こっちにも」と、生活するにあたって、誰もが不自由なく暮らしていけるよう工夫してあるところを何箇所も見つけた。

私の祖母は、七年前、ある重い病気にかかり、その後遺症で「障害者」になってしまった。手術が成功して、目覚めた祖母は、体全体の感覚がなかったそうだ。首から下を動かすことができなくなってしまった。今でも歩くのにも相当な時間を必要とする。そして、多くの「協力者」が必要になった。今、祖母は、たくさんリハビリをして、少しずつ歩けるようになり、身の回りの事は時間をかけながら自分でできるようになっている。祖母が少しずつ歩けるようになったのは、祖母のがんばりとそれを支えてくれた制度のおかげだと思う。

祖母は、日本の社会福祉制度にたくさん助けられたと言っていた。

日本には、社会福祉制度というものがある。児童、母子、心身障害者、高齢者など、社会生活を送る上で、ハンディキャップを負った人々に対して公的な支援を行う制度のことだ。私の祖母は、この制度にたくさん助けてもらったそうだ。話を聞いてみると、その制度はとてもすごい。祖母は、リハビリをするためのヘルパーさん、買い物に同行してくれる人、お掃除をしてくれる人、さらにお料理を手伝ってくれる人が、毎週家に来てくれるのだ。全てがリハビリである。多くの人が家に出たり入ったりする。祖母は孤独で

はない。毎日忙しそうだ。

今年の夏、東京パラリンピックが開催された。腕がない人、目が見えない人、足がない人……。こんなにもハンディキャップを持っている人がいるのか。そして、競技をして勝負に挑む。どれだけの努力と、それを支える協力者がいたのだろう。色々な意味で感動した。

世界にはたくさん障害者がいる。その中で差別がおこることも少なくはない。ハンディキャップを負った人も自立し孤独にならないために、制度を活用すること、そして健常者の私たちの理解と協力が大切だと思う。



差別のない世の中へ

東中学校

1年

高木 菜央 たかぎ なお

近年、差別問題は社会全体で取り組むべきだという認識が広まってきており、差別解消のために活動をする人も多くなってきました。しかし、それでもまだ差別が起こっている現状があります。性的マイノリティの人や、障がいのある人、人種が異なる人への差別など、まだまだたくさん差別が今もどこかで起こっています。

差別とは、なぜ起きてしまうのでしょうか。私は、その理由を二つ考えました。

一つ目は「人と違うことはおかしい」という考えを無意識のうちに持っているからです。これは性的マイノリティの人への差別が例となるでしょう。この夏、開催されたオリンピックで女子ウエイトリフティングの選手が注目を集めました。この選手は、体は男性として生まれ、二十三才で一度現役を退くまでは男子の選手として活やくしていました。現役を退いた後、二〇一二年に性別を男性から女性に変え、自身がトランスジェンダーの女性であることを公表しました。そして、競技生活を再開し、LGBTQの女性の選手として初めてオリンピックに出場しました。残念ながら記録を残すことは叶いませんでしたが「元男性が女性として参加するのは公平なのか」といった否定的な意見もある中、競技に打ち込む姿は多くの人の心を打ちました。このように世間から性的少数者と言われても、自分が生きたい生き方をし、堂々と表舞台に立ち、活やくしている人がいます。「人と違うことがおかしい」ということはありません。どんな人もそれぞれの色を持っているのだから、自分がそれが良いと思っただけを信じて生きれば良いと思います。

二つ目は「自分よりも劣っている」と感じるからです。これは高齢者への差別が例となるでしょう。若い人と高齢者を体力の面で比べると、高齢者の方が体力が少なく「劣っている」と感じることもあるかもしれませんが、しか

し高齢者の方々は豊富な人生経験、長年培ってきた知恵などを持っており、これまでの日本をつくったと言っても過言ではない、本来敬うべき人々なのだと考えます。今までの人生で様々な仕事をしてきたのですから、体力が少ないのは当たり前のことです。「劣っている」というより、長年の苦労によって「疲れている」という方がふさわしいのです。まずは「劣っている」と思っただけなら、助けてあげるのが道理です。そもそも「劣っている」というのも失礼な話ですが、若い人ができることは、今に至るまで日本をつくってきた高齢者の方々に感謝し、敬うこと、また体力的に困難なことは手伝ってあげることではないでしょうか。

差別のない世の中にするために、これから大切になるのは「理解し合い、認め合う」ということだと思います。まずはその人のおかれた状況、生き方、考え方を受け入れ、理解する。容易なことではありませんが、話をしっかりと聞き、よく知ろうとする気持ちが相手に伝われば、意外と分かるものです。そして、お互いを認め合う。欠点や不自由な点は皆あり、反対に美点や優れた点も皆持っています。様々な欠点も個性だと考えれば、きつと認め合えるはずですよ。

これから私はたくさんの人と出会っていきます。どんな人とも認め合えるように、欠点も美点もまずは受け入れ、相手の考えをよく理解しようとする。またはそれも個性だと思っ、人間の不完全さを好きになろうとする。そういったことをしていきたいと思っています。

差別のない世の中は、一朝一夕には実現できません。一人一人がこうした取り組みを積み重ね、他者に対する理解を深め、一日も早く実現させましょう。

◆ 入 選 ◆

「ぼっち」を楽しむ

東中学校 3年 高山 玄

たかやま ひかる

みなさんは、「ぼっち」という言葉を聞いたことはありませんか。孤独・一人ぼっちを意味する言葉で、友達がおらず、いつも一人でいる様子を表すそうです。

私は最近、ぼっち系ユーチューバーという人たちが存在すること知りました。その内のひとりの大学生ユーチューバーに興味を持ちました。彼は、大学に通いながら、一人で過ごすキャンパスライフや自炊の風景・旅行動画・日常生活で自分が感じたことなどを投稿して人気を集めています。チャンネル登録者数も五十二万人を超えていて、彼のライフスタイルを綴った書籍も販売されるほどです。

なぜ彼がこんなにも人の心をつかんで離さないのかを私なりに考えてみました。第一に彼の人柄が動画の中から伝わってくるのだと思います。他者ではなく、自分の置かれている立場について丁寧に語っているところ。孤独を恐れず、堂々と「ぼっち」を受け入れ楽しんでる様子、飾らない素のままの自分を人前で出せる勇氣と強さがあります。第二に、「ぼっち」を肯定的に捉える姿に多くの視聴者が自分を重ねあわせ共感しているからだと思います。実際に彼の動画の中で、視聴者に彼が自分のどこが良いのかを尋ねるやりとりがあります。そこに寄せられたコメントの多くに「ぼっちでいいんだと勇氣をもらえました。」や「他の人にあわせる生活をやめました。」などといったものがありました。

このことから、普段の生活の中で多くの若者が、周りの目を気にして「ぼっち」にならないように、自分を抑え、人にあわせた行動をしているのかわかります。

ひと昔前に「おひとりさま」という言葉がユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされたそうです。「おひとりさま」とは、精神的に自立して、一人で行動することを楽しんでいる女性を表す言葉です。現在では、様々な意味で用いられていますが、今も昔も、自立した一人の人間として生きる姿勢は人の心を動かしします。

コロナ禍で、私達の生活は大きく変わろうとしています。感染の拡大で、行動が制限され、特に若者に協力が求められています。今だからこそ、他人に合わせることなく「ぼっち」を楽しむチャンスを迎えていると思います。近年、一人でキャンプをする「ソロキャンプ」が流行っています。好きなときに好きなように楽しめるのが魅力だそうです。みんなが、ひとり時間を寂しいものではなく、楽しいものと感じるようになれば、対人関係のストレスが減ります。また、相手を尊重し認められる力や、この先、何があっても乗り越えていける強さが身につくと思います。

人間はひとりでは生きられない。集団で動く、その場の空気を読んで行動することは必要なスキルだけれど、次世代を担う私たちには、ひとり時間を楽しむことが必要であり、大切にしていきたいと思います。

自分自身と向き合うこと

東中学校

3年

森山

楓

もりやま
かえで

みなさんは、「自分」を深く見つめられていますか。きっと多くの人が自分を見つめることに対して難しさを感じたことがあると思います。

私も、中学三年生になり、いろいろなことについて考えるようになってから「自分」を見つめることの難しさを痛感しました。

それを痛感したのは、道徳の授業で、自分の短所を長所に言い換える「リレーミング」の練習をしたときのことです。周りの友達が自分の長所と短所をどんどん書き出していく中で、私は自分の短所しか書き出すことができませんでした。私はそのとき、「どうして私は自分の長所を見つけることができないのだろう」と、とても悔しい気持ちになりました。

その後、私はどうしたら自分の長所を見つけられるのかを考えるようになりました。どんどん考えているうちに、自分の長所を見つけられない理由が浮かんできました。それは、「自分自身のことや、自分が頑張っていることに対して私自身が肯定してあげられていない」ということです。

私は今まで、自分の頑張っていることや、長所について「これは出来て当たり前前だ。」「自分は人より優れていることなんてない。」と思っていました。しかし、この道徳の授業をきっかけに自分の頑張っていることや、長所を肯定しようという考え方に変わりました。そして、自分自身を深く見つめるこ

と、向き合うことの大切さを改めて感じました。

これから私たち中学三年生は、今まで以上に本格的に自分の将来についての準備をすることになります。その準備をしていく上で、「自分と向き合う」ことはとても大切になってくると思います。だから私は、勉強でも、自分のどの教科が得意で、どの教科が苦手なのかをしっかりと向き合いながら考えていきたいです。

私は、この「自分を深く見つめること、自分と向き合うことの難しさ」を経験したことで将来やりたいと思うことができました。それは、人と関わりながら、会話などを通して相手が自分の長所を見つけたり、向き合うことを手助けしたりするような仕事に就くことです。この自分と向き合うことの難しさを感じた私だからこそ、何かできることがあるのではないかと思ったりです。そのためにも、今、私にできる目の前のことにしっかりと取り組み、もっと自分のことを知っていききたいです。そして、長所や頑張っていることに対して肯定してあげられていない人がいたら、自ら率先して声をかけ、自分を認めてあげることの大切さを教えてあげたいです。この世界の一人でも多くの人が自分自身を認められ、自分を好きでいられたらいいと思います。

◆ 入 選 ◆

差別のない未来へ

大東中学校

3年

寺崎

桃花

てらさき

ももか

七月二十三日から八月八日まで行われていた「東京オリンピック。」スポーツを通して世界中のアスリートが互いに讃え合う姿は、私たちに感動を与え、たくさんの勇気をくれました。そんな喜びにあふれている裏で、「COVID 19（コロナウイルス）」の問題も一年以上たった今なお、残っています。

皆さんは「ヘイトクライム」を知っていますか。ヘイトクライムとは、人種や宗教などに係る特定の属性を持つ個人や集団に対する偏見が元で引き起こされる嫌がらせ、暴行等の犯罪行為のことです。今、世界ではアジア系住民に対するヘイトクライムが多発しています。

最初に中国でコロナウイルスが発見されたことで「中国ウイルス」などと呼ばれ、アジア人差別が生まれたとされています。

私が以前ニュースで見た動画には、韓国籍の女性がレストランで食事をしていると欧米人の男性がつり目をしながら女性に近づくといいました。つり目の仕草というのは、アジア人は欧米人と違い、目が比較的細くつり目のようになっている様子から差別を表しているそうです。他にも、街を歩いていると突然石で殴られたり、通りすがりの人に暴言を吐かれたりなど調べれば調べるほど被害はたくさん報告されていて、これも一部でしかありません。

そこで、今、世界各国で「#StopAsianHate（アジア系へのヘイトをやめよう）」というスローガンが呼びかけられています。日本人も被害を受けているということは、私たちに無関係とは言えません。私たちに、アジア人差別の現状を知る必要があると思います。

そもそも、「差別」とは何なのでしょう。学校や職場、周りに同じ気持ちの人が大人数いると、少数派は立場が弱くなる。立場が強くなると弱い方に意見を言いたくなくなってしまいます。そこで悪口や暴言を吐くのが「いじめ」

だ、「弱い者いじめ」だとも言われますが、差別も同じなのではないでしょうか。私は、いじめと差別は「表裏一体」だと思っています。「アジア人差別」も、欧米の国々ではアジア人は少なからず住んでいるものの、まだ現地の欧米人の方が人数が多いので、差別が起きてしまうのではないかと私は考えました。

私は将来、英語を使って世界を渡り活躍する仕事に就きたいです。今はまだ作文という形でしか、差別について訴えられませんが、大人になったらボランティアや支援団体への寄付など行動に移していきたいです。また、今たくさん取り上げられている「SDGs」の目標10に「人や国の不平等をなくそう」が掲げられています。身近になってきた差別問題に少しでも自分が力になることがあれば、進んで協力し、よりよい未来となるように活動していきます。

「平和は、力によっては維持できない。それは理解によってのみ達成される。」この言葉は「アルベルト・アインシュタイン」が残した名言です。平和というのは互いに理解することでしか維持できない。一人一人が異なる人種、宗教、言語を尊重し合わなければ、差別が無くなることは無いのです。

今、コロナ禍で私は日々翻弄されています。コロナウイルスによって始まった「アジア人差別」ですが、コロナが無くなっても差別は無くなるのでしょうか。それぞれの性格、性別、個性、特徴を知り、認めることが、今の世界には必要です。

差別の皮肉さ、差別はいけないものだということを知ってもらい、世界が今よりも平和に。幸せになるように。差別問題に対して、向き合っていくたいと強く思いました。

◆ 入 選 ◆

今だからこそ、できること

大東西中学校

2年

おのさき いとの
小野崎 愛乃

「ステイホーム」今、この言葉を聞くと、誰もが新型コロナウイルス感染症を連想するだろう。世界では今、新型コロナウイルスによって行動を制限され、外出自粛生活を余儀なくされている。それにより、在宅時間が増え、生活習慣が乱れてしまった人が大勢いると問題視されている。特に最近では、スマートフォンやゲーム機器の使用時間が増え、いわゆる「ゲーム依存」「ネット依存」になる人が増加しているというニュースを頻繁に耳にする。私は、こんな今だからこそ、人との関わりをより一層大切にし、コミュニケーション能力を高めていくことが最も重要であると考ええる。

人と直接会って何かをすることが出来ない今、テレワークやリモートワーク、オンライン会議などが浸透し、SNSでのコミュニケーションが急激に進化している。よって、外出せずとも画面上で用事が済ませられ、人と話すことや仕事をするまで可能となっている。これらの機能をとっても便利に感じる人がいる一方で、様々な人とコミュニケーションをとる機会が減ってしまった、画面上のため正確にお互いの気持ちを伝えることが難しくなってしまう、と不自由に感じる人もいるのではないだろうか。

私もオンライン会議アプリを利用して習い事の英語をしていた時期があったが、対面授業とは異なり、意思疎通の難しさを感じる場面が多くあった。例えば、私は質問の答えに迷っていたのだが、質問の意味が分らないのだろうと誤解されてしまったり、タイムラグなどで表情が読めず、会話が思うように成立しなかったりすることが多々あった。しかし新型コロナウイルスの感染拡大が一時落ち着き、オンライン授業から今までの対面授業に戻った時は、やはりコミュニケーションがとれやすくと感じた。私の状況や気持ちが変わり、先生の意図もよく理解できて話がしやすかった。それは、対面で人と人とが接することにより、言葉だけではなくニュアンスや雰囲気、

空気感からも、気持ちを伝えることや、受け取ることが出来るからである。インターネットは、非常に便利なツールである。とはいえ、対面と比べてスムーズな会話ができない、熱量が伝わりづらく伝えたいことが正確に伝わらない、などというデメリットも存在する。ましてや、コロナ前の生活、コミュニケーションと完全に置き換えることは出来ない。元より直接人と会って話すことが減り、人間関係を築く機会が少なくなってしまうという問題点は解決出来ない。コミュニケーションとは、直接会って話すからこそ意味があり、それによって相手との信頼関係やつながりを深められるのだと私は考える。

しかし、コロナ禍の今ではそれが難しい。したがって私は、今は、身近な人とのコミュニケーションをより大切にするべきだと考える。ここでのいう身近な人とは、第一に家族であるが、同じ家に住む人、学校の友達、職場の仲間など、生活をしていたら必ず関わる人でもある。

気心知れた人と話すときは、少し言葉が足りなくても通じ合える、分かってくれると思えば、思ったことをよく考えずに口に出してしまうことがあるのではないだろうか。しかし、身近な存在だからこそ十分なコミュニケーションがとれなかったとき、些細なすれ違いから問題が生じることがある。そのため、本当にその言葉は相手に誤解を与えないのか、自分の一方的な考え方になっていないか、と話す前に一度自分のことを見直すことが必要である。そうすれば、ストレスを抱えることはなく、お互いにより過ごしやすいつながりを築くことができる。今だからこそ、身近な人とのコミュニケーションを大切に、絆を深めていくべきだ。

◆ 入 選 ◆

「宇宙船地球号」の危機

川越西中学校

1年

野本 のもと
和希 かずき

皆さんは「宇宙船地球号」という言葉をご存知だろうか。英語では「Space ship Earth」と表す、この言葉は地球上の資源は無限ではない、ということや、地球資源の適切な使い方などについて語るため、アメリカ出身のバックミンスター・フラーが提唱した世界観である。さらに、これは安全保障会議にも使われることがあるようで、まさに地球の現代を的確に表している言葉ということが出来るだろう。

しかし、これをインターネットで調べてみたところ、この言葉は特に自分たち若い世代にはあまり知れわたっていないという記事を見つけた。実際、自分も今の中学一年生になるまで知らなかった。

だが、この「宇宙船地球号」という言葉はさきほども記述したとおり、地球の現代を的確に表していて、現代の「地球温暖化」問題や、「人種差別」等の人権問題、「有限資源」等のエネルギーの問題などを当てはめてみると問題の深刻さが非常に分かりやすくなる。

そこで、本文ではエネルギーの問題と、戦争の問題を宇宙船地球号に例えて、現状の考察を試みた。

まず、エネルギーの問題だ。ここでは地球でのまい蔵量が限られている石油と、基本的には無限の再生可能エネルギーの二つを比べる。石油を宇宙船に積んである、調理済みの楽でおいしい非常食だとする。再生可能エネルギーは宇宙船で偶然発見された、自然の食物と考える。航海中、船外からは食物を得ることができないため、「大量にはあるが、有限で安全で楽でおいしいものを食べ続ける」か、研究次第で無限に生み出すことができるが、正体がよく分からず、調理もしなければいけないものを食べるかの二択になってしまう。

楽でおいしいからと非常食のほうを食べ続けてしまうと、有限な非常食はいつか底つきてしまい、船員はうえてしまうだろう。

早期に前記のようなことになると予想し、危機感を抱き、無限に生み出す

ことができる可能性のある食物を研究し、実用できるようにすれば、非常食ともへい用して船員たちの安定した食生活は手に入れることができるだろう。

よって、このまま楽で便利な石油を使い続けてしまうと、人類の安定した生活はあやうくなってしまうだろう。対して、まだ世界で普きゅうしているとは言い難い再生可能エネルギーをさらに研究し、普きゅうさせれば人類の安定した生活がよりはつきりと浮かび上がるだろう。

次に、戦争の問題だ。ここでは地球上の国家を、宇宙船上でほとんどの行動を共にする班だとしよう。ある班同士で食料の量について口論をしている。どちらも自分たちの班の主張を曲げずに延々と続く口論に両班は、すぐに口論を自班の主張通りに進め終わらせたいと思うだろう。そこで同志を集めようとす。自班にとつて都合が良い情報だけを並べて、他班を巻きこみ、優位に口論を進めようとす。それでも決着が着かず、少量の武器を使い、おどしてでも自班が優位に立とうとする。当然それに対こうするために相手も武器を使う。そのころには船内の全ての班が、すでに口論から戦争と化した争いに参加して、もしくは参加させられているだろう。

地球は大きいからすぐにここまではならないと考えることこそ危険だ。問題背景が大きかろうと小さかろうと、行ってしまったことが同じならば、行き着く先は同じだ。

今回は二つの問題を挙げ、それらを宇宙船に当てはめて考えた。地球という大規模の案件を宇宙船というある程度小規模に当てはめることで、地球がかかえている問題が現実味が増し、深刻さが分かりやすくなる。

今までのことをふまえて主張する。「宇宙船地球号」という言葉は現代の地球の現状を見直すことができるものとして今より多くの人に、認知されるべきだ。

生きがいと感謝

川越西中学校

3年

奥富 晴菜
おくどみ はるな

私は、最近「生きがい」という言葉について考えさせられることがあった。私の母の祖母は昭和四年生まれの九十二歳である。足腰は弱ってきたけれど、まだまだ元気で、会いに行くといつも熱心に新聞を読んで世の中のことを把握しようと情報を集めているからすごい。

そんな曾祖母の生きがいとなっているのが畑である。家から百メートルくらいのところに畑を借りていて、自分の好きな野菜を育てている。じゃがいも、大根、ねぎ、ズッキーニなど季節の野菜を作り、収穫しては家族だけでなく近所の方や、ひとり暮らしで困っている高齢の友人に配ったりしているのだ。野菜を喜ぶ人の顔を見ることが何よりうれしいそうだ。夏の暑い日も早朝から作業をしていたり、台風が近づくと強風にも負けず畑が心配で見に行ったりしてしまうくらい熱心で、その気持ちの強さに感心してしまう。

「畑で死ぬなら本望だ」

それが曾祖母の口ぐせで、その表情はとても誇らしげで自信に満ちている。畑で野菜を作ることは曾祖母の生きがいなのだ。

ところが、この間、曾祖母が畑で作業しているときにつまづいて転んでしまい足を痛めてしまったのだ。しばらくは畑には行けなくなってしまい、代わりに一緒に暮らしている祖父が畑をすることになった。慣れない祖父の手つきでは、納得いかないようで、不満な態度をとる曾祖母に、家族はともも困っていた。そこで、年齢や体のことも考え畑を返すことを曾祖母に提案することになった。

私はそれを聞いて、曾祖母の生きがいを奪うことになってしまうのではないかと思い、心配になった。確かに、面倒を見ている家族は本当に大変だし、

家の中でゆっくりと過ごしてきてくれたほうが安心かもしれない。でも、再び畑仕事をしたいと毎日、体操をしたりして、目標に向かって努力している曾祖母の気持ちも大切にしたいと思った。

人にはそれぞれ生きがいがある。中にはタバコやパチンコが生きがいという人もいると思うし、スマホを見るのが生きがいという中学生も少なくないだろう。

だが、度が過ぎてしまうと他人や家族に迷惑をかけたったりして、自分の問題だけではなくてしてしまうこともある。人は誰かに支えてもらって生きていくと私は思う。だから曾祖母も自分の好きなように畑をやるんだと頑固になるのではなく、体力が弱ってきた自分を受け入れ、家族の協力をうけながら大好きな畑作業を続けていくことが一番良い方法なのではないかと思った。お互いの歩みよりが必要だと思ったのだ。

その気持ちを思い切って伝えてみたところ、みんなが分かってくれて畑を返すという提案は中止となった。今、曾祖母と家族が協力し重いものを持つなどの作業は力を借りて畑を続けているそうだ。

人生の喜びを追求することはとても素晴らしいことだと思う。でも、それと同時に自分を支えてくれる誰かがいるということに感謝を忘れてはいけないと私は主張したい。

私は、まだ生きがいと言えるほど夢中になれるものはないけれど、これからの人生で曾祖母のような生きる喜びを見つけられたらいいと思う。

◆ 入 選 ◆

面倒臭いでは済まされない

星野学園中学校

2年

関 せき
彩花 さやか

「環境問題」という言葉から皆さんが連想するものは何ですか。まず、身近に感じる環境問題として、地球温暖化による気候変動を想像する人が多いのではないかと思います。しかし、これだけ地球温暖化が取り上げられているにも関わらず、地球温暖化の原因物質である二酸化炭素の排出量は、中国、アメリカ、インド、ロシアに次いで日本は五番目に多いということ皆さんはご存じでしょうか。

先進国であり工業化が進んでいる日本には便利なものがたくさんあります。暑くなればエアコンをつけることができ、少し遠くに買い物へ行く時は、車に乗って行くこともできます。お菓子はきれいなプラスチックフィルムで個包装されたものが多く、友達に配る時にも便利だと思っています。私は、こんなに便利な物があるのであれば、使わない手はないと思い、何も考えずに使っていました。

そんなある日、十八歳のスウェーデンの環境活動家、グレタさんの演説を目にしました。彼女は、日本を含む十か国が温室効果ガス排出量の七割を占めているとしたうえで、「被害を受ける子どもは多くは排出量の少ない貧しい国の子どもたちで不公平だ」と訴えていたのです。また、これに合わせユニセフが気候変動の子どもへの影響を分析した初めての報告書によると、全世界で十億人の子どもが大気汚染のリスクにさらされていると指摘したのです。サイクロンの影響を受け、食糧が手に届かない子、サイクロンの被害で学校がなくなり教育を受けられない子、洪水により浸水した町で暮らす子、中央アフリカやギニアでは、気候変動の影響を最も強く受け、健康が脅かされて命に関わる病気の危険にさらされている子がたくさんいるそうです。私はこの現実を知り、本当に心が痛みました。地球温暖化の問題を、二酸化炭素の排出量が多い国だけの問題として考えていたからです。何も関係のない途上国の子どもたちがこんなに苦しんでいることに、今まで気が付くことが

できませんでした。それと同時に、十八歳のグレタさんの行動力に心を打たれ、一人の日本人、世界の一員として、環境問題に対して真剣に考えていなくてはならないと強く思いました。

日本では、レジ袋の有料化などによりプラスチックゴミを減らす動きが強まっています。しかし、プラスチックゴミが無くなったわけではありません。ペットボトルのラベル、必要のないお菓子の個包装など、まだまだプラスチックゴミを減らせるのではないかと私は思います。包装を紙にする、ペットボトルのラベルレスを進めるなどの動きを加速してもらいたいと思っています。

日本は、私が生まれるずっと前、高度経済成長期に急激な工業化が進みました。しかし、工業化がもたらしたのは利便性だけではなく、「四大公害病」をもたらしました。この四大公害病は人々の生活に大きく影響し、結果として死者をも出してしまったのです。日本ではこの過去の失敗があるにも関わらず、更なる利便性を追い求め、今もなお工業化を進めています。工業化自体、決して悪いことではありません。しかし、二酸化炭素が大量に発生する燃料の使用を水素エネルギーに入れ替えるなど、もともともと真剣に考えなくてはいけないのではないかと思います。

私たちの二酸化炭素排出による気候変動によって、一番苦しんでいるのは、何も関係も責任もない貧しい国の子どもたちです。そして体の小さな子どもたちは、大人に比べてこの温暖化を生き抜くことが難しいのです。地球温暖化は日本の異常気象のみならず、世界の子どもにも影響を及ぼしていることに私たちはもっと目を向けなければならぬと思います。まずは、関係ない、面倒臭いでは済まされないといいことを強く認識し、一人一人ができることから、そして世界の一員として、将来の地球を守る行動をしていきましよう。

高齢社会と思いやり

星野高等学校

2年

あきやま はるか
秋山 晴香

昨年の夏、家族でお墓参りをした帰りに、食堂へ立ち寄りしました。しばらくしてから、車いすに乗った高齢の婦人と付き添いの女性が入店してきました。二人が、私の椅子の横を通りすぎる瞬間、車いすの婦人が突然「どうして邪魔をするんだ。」と大きな声で怒鳴ったのです。私は一瞬、何が起こったのかわかりませんでした。なぜか、付き添いの女性は黙っています。婦人はさらに激昂し、「今どきの若い者は。」と大声を出しました。どうしようかと思ったとき、母が立ち上がり婦人の顔を覗き込むようにして「すみません。お邪魔をするつもりはなかったのですよ。」と静かな口調で謝り、その場を取まりました。

「なぜ謝るの。私は何もしていないのに。」と訴えました。それに対して母は、「うちのおばあちゃんと同じ病気だと思う。顔の様子が同じだったから。」と答えました。そして、「付き添いの女性が黙っていた理由は、注意をすると婦人が余計に暴れるからだよ。」と言葉を続けました。

母が言ったおばあちゃんとは、十年前に他界した祖母のことです。祖母は七十歳を過ぎてから高齢者に多く発症するパーキンソン病を患いました。パーキンソン病とは、手足が震えて歩きづらくなったり、食べ物の匂いや味がわからなくなったりする脳の病気です。そして、顔がこわばり表情がなくなるのが特徴です。亡くなった祖母は、短歌や洋裁が好きな穏やかな人でした。ところが病気になってから、徐々にその人柄が変わり、家族に向かって大声で怒鳴ったりするようになってしまいました。その後、パーキンソン病に多いレビー小体認知症と診断されました。

レビー小体認知症の症状として、幻覚と妄想があります。幻覚は、様々な幻を見たり、ないものがあると誤解したりします。また妄想では、物を取られたり、悪口を言われたと思ひ込んでしまいます。症状が進むと、騒いだり叫

んだり、人格が変わってしまったかのような振る舞いをしてしまいます。

そのことを知ってから、私は食堂で出会った婦人について改めて考えました。おそらくあの婦人は認知症による妄想から、私に進路を邪魔されたと思ひ込んだのでしょう。もしかすると、婦人と同じように、街中で見かけるいわゆるキレる老人や、交通事故を起こす高齢者も、同じように脳の老化が原因となり、事故や事件を起こしているのかもしれない。

現在の日本は世界に例を見ない速さで高齢化が進んでいます。内閣府による令和二年高齢社会白書によると、令和元年の総人口約一億二千万人に占める六十五歳以上の人口割合は約二十八パーセントです。四十五年後には総人口が約九千万人に減少し、六十五歳以上の人口が約四十パーセントへと増加します。認知症の発症割合もそれに伴い増加します。

加齢は、誰にでも訪れる現象であり、認知症は誰でもなる可能性があります。必要なことは、加齢により、どのような現象が起きるのかを正確に知ることです。私の母は、怒鳴った婦人に冷静な対応ができませんでした。これは、祖母を看取った経験によるものです。このように、私たちは自らの加齢と、それに伴う現象について学ぶとともに、高齢者施設や病院などでボランティア経験を積む必要があると思います。そして国や自治体、マスメディアは加齢と老化に関する情報を、今よりもさらにわかりやすく発信してほしいと思います。それらにより、加齢に対して理解を深めると同時に、自らが高齢者になった時の変化に対して備えができます。

怒鳴られたら、怒鳴り返すのではなく、一瞬立ち止まって考える余裕を持つことが大切だと思います。そして私は他者に対して寛容な心を持つことが、暮らしやすい社会を作り上げることにつながると考えます。

【選評】

審査員長 南古谷中学校教諭 小林 裕子

「川越市青年の主張作文」は、川越市青少年を育てる市民会議・川越市・川越市教育委員会が主催する作文コンクールです。当コンクールは、青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓発と、青少年の健全育成に関する大人の理解・関心を高めることをねらいとして、昭和六十二年度から実施されています。

歴史ある当コンクールに、今年度は中学生の部に二百四十一編、そして、高校生及び一般の部に六十五編という多くの応募がありました。その中から、審査の結果、中学生の部から十二編、高校生及び一般の部から一編の合計十三編を選出作品に決定いたしました。

新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延、それに伴い一年延期された東京オリンピックの開催といった状況のなか、今年度の応募作品には、オリンピック、新型コロナウイルス感染症、それにまつわる社会の諸問題を取り上げたものが多数見受けられました。また、昨年度までと同様、「環境問題」「差別」「障碍」について考えた作品も多くありました。その中で、入選作品として選ばれた作品は、ただ単に疑問や課題を述べるのではなく、「自身自身はどう考えるのか」「自分はどの向き合っていくべきなのか」といった主張がしっかりと書かれたものでした。ありふれた表現ではなく、その文章から書いた人自身が見えてくる作品を今後も待っています。そうした文章を書けるようになるために、普段からニュースや時事問題に関心をもつこと、さまざまなことに挑戦をし、いろいろな経験をすること、他者の意見に耳を傾け多角的な視点をもてるようになることに努めていってください。

入選作品のうち、上位三作品は次の通りです。

最優秀賞 阿野 晃明さん 「SDGs実現のために」

優秀賞 齊藤 ひよりさん 「着る」ことを考える」

優秀賞 小村 美柚さん 「私が好きなもの」

最優秀賞になった阿野晃明さんの「SDGs実現のために」は、「SDG

s」という全世界的な課題を取り上げながら、身近な存在である自分の兄の障碍のことを作文に記しました。障碍をもつ人の能力を活かすことで「誰一人取り残されないよりよい社会」を実現する。そのためにはまず障碍を「知る機会を作る必要がある。」強い思いを、自分の経験を交えて、自分自身の言葉で書いた文章は、私たちに説得力をもって訴えかけてくるものがあります。

優秀賞となった齊藤ひよりさんの「着る」ことを考える」は、「大量廃棄社会」を抱える問題を、具体的な数字を用いることによって、安易にものを捨てる私たち読み手に警鐘を鳴らしています。問題を改善するための方策を父親の行動から考え、自分にできることとともに、社会に対する提言を行っています。誰もが身に付ける「衣服」がはらむ問題点について、同年代の青少年に気づきを与えてくれる作品となっています。

同じく優秀賞の小村美柚さんの「私が好きなもの」。小村さんの「好きなもの」は、「現代短歌」です。「短歌が好き」というだけあって、言葉の使い方が絶妙で、次はどのような表現が飛び出すのだろうと、先を楽しみにしながら読み進めていきました。短歌の素晴らしさや言葉のもつ力を私たちに再認識させてくれるとともに、「文化の継承」にも触れ、次代を担う青少年の柔軟性、そして、力強さを感じました。

社会に対して感じる自分の内なる疑問を深く見つめ直したり、多くの視点から考え直したりしていたものが他の入選作品にも多く見られました。青少年の皆さんはこの作文集を通して、同世代の青少年の主張に触れ、自らの考えを深化させていってほしいと思います。

新型コロナウイルス感染症により、制限を強いられる生活のなかでも、未来を生きる青少年はさまざまなことを感じ、考え、自分の思いを深めています。彼らの心のうちの思いを真摯に受け止め、さらによりよい社会を築くために、皆さまにご一読いただければ幸いです。